慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

| | |
|---|---|
| Title | ラテン・アメリカ協会編『ラテン・アメリカの歴史』 |
| Sub Title | La Sociedad Latino-Americana (ed.) : A history of Latin America |
| Author | 賀川, 俊彦(Kagawa, Toshihiko) |
| Publisher | 慶應義塾大学法学研究会 |
| Publication year | 1964 |
| Jtitle | 法學研究 : 法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.37, No.10 (1964. 10) ,p.108- 112 |
| JaLC DOI | |
| Abstract | |
| Notes | 紹介と批評 |
| Genre | Journal Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19641015-0108 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

国主義の本質あるいは現段階の規定をめぐる批判ならびに反論を究明し、またフルシチョフ的共存政策の前提、方式、意図を分析して、彼の修正された共存理論においては国内政策が実は対外政策となつていること、対外政策は必ずしも国内政策とはなつていないこと、したがつてそこに民族解放戦争の問題について見られるような曖昧さ・矛盾が残されていることを明らかにした後に、つぎのように述べている。すなわち、フルシチョフの共存理論はより一層の国際緊張の緩和こそが非共産主義社会における社会的・政治的な変革にとつてよりめぐまれた条件を用意することになろうと考えているが、むしろ「共存の弁証法は民主主義社会における共産主義革命にたいしてよりは共産主義社会における民主主義革命にたいして、より有利に作用する」（二二二頁）のではないかと。

以上において紹介した二編を除く他の諸論文は、先に述べたように既に発表されているものである。しかしそのことによつて本書の価値はいささかも損われてはいない。本書を構成している一〇編の論文がスターリン以後の変化を取扱つているという単純な理由からではなくして、そのいずれもが、かかる変化の解釈を、いいかえるとソヴエト政治の内的世界――タッカーのいう政治思想（それは思考様式、認識方式、心理的態度、イデオロギー的前提、理論を包括した概念である）における発展の解明を共通の主題としており、したがつてまたソ連研究に際して核心的な問題である理論と政策との関連についての解答が、総合的に、用意されているからである。

（中沢精次郎）

ラテン・アメリカ協会編

## 『ラテン・アメリカの歴史』

一　世界史上、ラテン・アメリカの歴史は比較的日が浅い。ラテン・アメリカ史のそこにおける比重も、同じ大陸に連なる米国に比するならば格段の相違があるようだ。だが、歴史とは、民族の貧富、あるいは国家の強弱によつてその比重が決められてはならないし、まして、帝国主義・植民地主義の没落と後進諸国の大幅な前進をもつて飾ろうとする二〇世紀の歴史においては、それはなおさらのことである。

さて、わが国では、これまで、ラテン・アメリカに関する歴史書たるや、じつに皆無に等しい状況であつた。専門的研究書はおろか、一般的歴史書すらなかつたこと、この事実は、わが国学界の偏向をあらわすものであるといつても過言ではあるまい。戦後の空白期を経た昭和二四年、田中耕太郎博士になる「ラテン・アメリカ史概説」が出版されたことは、こうした時期にあつて、まさに一条の光がさし込まれたかの感がある。しかし、カトリック的主観に立つこの著作は、畢竟、客観性、普遍性を期待される歴史書としてはほど遠いものであつた。

それから一〇年、いま、著者は、赤表紙の、コディセ（古典）を思わせるようなインディオ調に包まれた、部厚く貫録のある書物を手にしている。「ラテン・アメリカの歴史」――数名の研究者による総合的歴史概説であり、待望の書である。ラテン・アメリカの政治であれ、経済であれ、社会であれ、この地域研究のすべてにとつて、それぞれの基盤をなし、あるいは背景をなすべき必携の書として、各方面から寄せられる期待も多大であつた。筆者も、他事ならず嬉しさでいつぱいなのだが、本書の編纂を最初から手がけられ、出版の労をとられたラテン・アメリカ協会、井沢実理事長、ならびに中曽根悟郎氏への感謝の気持を含めて、ここに本書を紹介し、加えて私見を述べておきたい。

二　本書は、ラテン・アメリカ史の概説書である。したがつて、専門的歴史書としては未だ十分ではないし、ラテン・アメリカ史を押しなべて網羅するものでもない。むしろ、一般的興味の寄せられ、また歴史上比較的重点のおかるべき時点なり、地域、事項を題材としている。全体は六部からなり、さらにそれぞれ項目別に分担執筆されている。一見、六部に分けられていることが、そのまま時代的分類であるかのごとき錯覚を起し易いが、それは本書の性格からしてあながち編集者側を責めるわけにはいかないであろう。

三　アメリカ大陸発見以前の歴史、すなわち、プレ・コロンビナ文明に関するわれわれの知識はきわめて乏しい。神秘的なるがゆえにわれわれの興味をそそるインカ帝国やアステカ帝国などは、大陸の発見と征服の時代にむしろ密接に繋がるものである。本書の書き出しは、紀元前八〇〇〇年に遡ると云われる先住インディオに関して、考古学的見地からの探りを入れることから始められる。初期狩猟民、採集漁撈民文化の跡を指摘し、トウモロコシがプレ・コロンビナ文明の経済的基盤となり、高度の文明を支える前提となつたことを明らかにする。

このトウモロコシ文明がユカタンを中心とするマヤ、アステカ両帝国として、アンデス山系ではインカ帝国として開花したのであるが、「ラテン・アメリカのあけぼの」における神話・伝説の織りなすラテン・アメリカの序曲は、いかなる科学的メスをもつてしても受けつけぬ神秘的な黎明を奏でるかのごとくである。

一方、新大陸がラテン・アメリカとしての歴史過程を歩みはじめるためには、この土着文明とイベリア文明との結合をまたねばならなかつた。要するに、ラテン・アメリカの歴史は、土着文明を母とし、イベリア文明を父として生れたのである。言語はもちろん、風俗、習慣、社会諸制度など、今日のラテン・アメリカを理解するためには、何はさておき、父なるイベリア文明を念頭におかなくてはならない。ラテン・アメリカ史の背景には、古代からのイベリア半島における紛争軋轢、文化的社会的諸制度の変遷が深く織り込まれているのである。

従来、イベリア半島の歴史に関してはほとんど紹介されたものがなく、ラテン・アメリカ史の研究にとつて大きな障害であつたが、本書ではイベリア文明の形成について、その歴史的背景が説かれていることはまことに参考になる。五世紀中葉の西ゴート族による征

服と、これに対して八世紀から一五世紀のグラナダ王国成立までの国土回復運動について、ヨーロッパ封建社会の形成を背景としたカスティリヤ、アラゴン両王国の国土回復とそれにともなう国民国家の形成が画かれ、またポルトガル王国の成立についての史実が明らかにされている。結局、こうした国土回復運動によつて涵養された国民精神の統一と昂揚が、遠く海外に新領土を求めるための冒険心を誘い、新大陸の発見へ植民へと進展を促すのであるが、その間の精神的姿勢をここに理解することができよう。

四　一種の十字軍的意識による国土拡張運動、それが新大陸の発見を促したわけだが、スペイン・ポルトガル両国ともに、海外遠征の直接目的がインド貿易、なかんずく香料島として知られた日本との交易にあたつたことは面白い。「ラテン・アメリカの発見と征服」の項には、冒険、探険者たちの成功や失敗、誤解など、多くの逸話が集められており、興味深い。

新大陸の征服物語は、プレスコットによつて一般に馴染まれているが、それはまさにスリルとサスペンスの連続である。かれの言葉を借りるならば、それは「騎士物語のように事件にみちみちたもの」であり、「歴史というよりはロマンスのようなもの」であつた。また、「歴史家がこれまで筆にしたこともないほど、大胆にして驚くべき冒険をともなう素晴しい題材であつた」とも語つている。

かつて、この種の歴史小説が華やかな一時代を飾つたことがあるが、ラテン・アメリカの歴史を通ずる場合、はたして征服時代なる一時代を画すべきものがあつたかどうかは疑わしい。というのは、およそ征服者たちは軍事的征服のための兵士であると同時に、原住民の改宗教化を目的とする僧兵であり、さらにまた植民の使命を負う屯田兵でもあつた。したがつて、軍事的征服が植民教化の前提であり、その歴史的価値としては高く評価されるべきであるとはしても、時代区分するには当らないのではなかろうか。この点、歴史が文学的興味本位に誇張され、歪められるようなことであつてはならない。ラテン・アメリカの歴史は、新大陸の発見と征服を接点として、直ちに植民地時代に展開しているのである。

五　「ラテン・アメリカの植民地時代」はラテン・アメリカ史の基盤をなすものである。ラテン・アメリカの現代的発展過程を考察するにあたつても植民地時代の研究がいかに必要であるか痛感させられる場合が多い。この時代に適用された諸制度、その多くはイベリア半島から転移されたものだが、それらは今日でもこの地域諸国のどこかで見出すことができる。

本書では、植民地時代を概説するに、スペイン領アメリカとブラジルそれぞれの植民地時代について述べられている。両者ともにきわめて記述的であり、植民地体制、通商、教会、社会問題などの理解を早めるに役立つであろう。しかし、そこには、いかなる問題であれ理解を深め、また、現代との関連においてそれぞれの問題に関する意義を見出すにいたらないことは惜しまれる。たとえば、アウディエンシアやカビルド、特にカビルド・アビエルトの問題に関して、せつかく言及しておきながらも具体的内容には触れられていない。また、植民地体制の基本的概念である政教主義の問題に関して

も、その根幹とみなさるべきレアル・パトロナート（インド保護王権）が述べられていないことは、まさに骨抜きの感がある。

ラテン・アメリカの歴史的展開過程において、この植民地時代はもつとも重視さるべき部分であるにもかかわらず、本書では記述的ではあつても深みに乏しく、纏め方にもちぐはぐなものがあることはいかにも惜しい。

六　ラテン・アメリカが三世紀にわたる植民地体制の桎梏を解き放ち、独立した歩みをはじめるにいたる過程、そこには多種多様な諸要因がひしめき、互いにからみあつている。「ラテン・アメリカの独立とその影響」では、独立革命の諸要因を追求し、革命の経過を述べるとともに独立後のラテン・アメリカと諸外国との国際関係が述べられる。

ラテン・アメリカの独立革命は、啓蒙思想を精神的支柱とした一種のナショナリズム運動であつた。そこには、独立を指向した積年の動きがあつたし、また独立を促す内外からの大きな衝動もいくつか数えられよう。だが、本書では、これらの原因論が比較的なおざりにされているようで、重点は独立運動の経過と結果論におかれているようだ。いま少し原因論を掘り下げ、また、ラテン・アメリカ社会の独立に向う極化現象について触れるならば、独立革命史として均衡のとれたものになると思われる。

七　植民地時代のラテン・アメリカは二つの統治体であつたが、独立後はスペイン系諸国の分立割拠するところとなり、それぞれ異なる歩みを運ぶことになつた。「ラテン・アメリカの近代」は、ブラジル、ラ・プラタ諸国、アンデス諸国、メキシコ、カリブ海地域の五つの地方に大別してそれぞれの近代をとりあげている。

本書では、この近代の部分にもつとも多くのページ数を割き、重点を置いているだけあつて、その内容も豊富であるし、ラテン・アメリカ諸国の独立から第二次大戦前までのおよそ一世紀間がほどよく纏められている。ただし、五地方の近代を扱う小項目の見出しに、いずれも「近代化」なる言葉が用いられていることに多少の抵抗を感ずるのは、単に筆者一人のみではなかろう。特に「近代化」――モダニゼーション――なる言葉がやかましく分析されている昨今のことでもあり、ラテン・アメリカ諸国の前進と後退を繰り返す近代化の歩みを知るにつけ、時代区分としての近代はともかく、その内容を顕示する表題とは裏腹の感がある。

もつとも、ラテン・アメリカ諸国は独立を契機としていずれも近代諸国の仲間入りをしたことは事実であるし、その歩みこそ遅々たるものであれ、紆余曲折したものであつても、大局的には近代化への歴史過程を歩んできたことには間違いない。だが、厳密にいうならば、ラテン・アメリカの近代化とは、ほとんど一九世紀末以降にあてはめらるべきであろう。いずれにせよ、言葉の混乱は避けたいものである。

八　ラテン・アメリカの近代化は、むしろ現代に集中している。本書の締め括りは「現代のラテン・アメリカ」として、これまでの歴史的叙述から論文調に変る。内容はメキシコ革命、ボリビア革命、キューバ革命を扱う「三つの革命」、それに「ナショナリズムと現

代ブラジル、アルゼンチン」と「チリー、ペルー、コロンビアの改革運動」として、いずれも現代ラテン・アメリカの動態的特徴がとり上げられ、展開されている。

現代の特徴としては、急激な工業化と産業の多角化をともなう経済的変化にまず注目させられよう。ついで、都市中産階級の増大は、従来の封建的階級組織をとり崩し、大きな政治的変化を促していることである。すでに経験した三つの革命は、革命の頻発するラテン・アメリカにあつても社会革命の典型をなすものであるし、さらに、その方法ないし形態こそ異なれ、ブラジルの農民運動、アルゼンチンの労働総同盟、さらにチリーの人民戦線、ペルーのアプラ主義運動、コロンビアの自由主義的エリート層の動きなど、従来の体制を揺さぶるような要素がますます強化される傾向にある。論考はいずれも適確に焦点を捉えており、本書全体を通じての圧巻といえよう。

九　以上、本書の紹介というよりは多くの苦言を呈することになつてしまつたが、ラテン・アメリカの研究に関して、わが国では、これまでに、本書以上に貢献したものはまずあるまい。歴史書としての本書は、まだ多くの欠陥もあり、将来の研究にまたねばならぬ点も多々あるが、ラテン・アメリカの地域研究の諸分野に背景を与え、また、数々の問題点を提供したことで、筆者は担当執筆者諸学兄ならびに編集・監修の労に当られた諸氏に対して満腔の敬意と感謝の意を表したい。（中央公論社刊　八八〇円）

（賀川俊彦）